

RITA

利他の心で

教育を変える

仕事がおもしろくなる

vol.

9

Local Philosophy

地域が 次世代を育て、 地域を 自治する。

利他のDNAを
世界へ、
そして未来へ



RITA
LABO

西郷どんを育てた 郷中教育とフィロソフィ

原口 泉 先生
鹿児島県立図書館長
志学館大学教授

NHKの大河ドラマ「西郷どん」が話題です。
ドラマの時代考証をされている鹿児島県立図書館長の原口泉先生に、
明治維新を実現していく若者たちを育てた薩摩藩の
「郷中教育」についてお話をうかがいました。

「郷中教育」とは何だったか？

——稲盛和夫氏は自伝などで「地域の郷中教育で幼少期から倫理観を育まれた」と語っています。郷中教育とは薩摩藩の武士の子弟教育が、自顕流を核とした剣法や武士としての生き方を学ぶ地域の教育組織と聞いています（明治以降も「学舎」として存続）。実際にはどのような教育が行われていたのでしょうか。

原口 郷中教育というのは、人格を育てることを主眼とした地域の教育で、大人になってからでは身につかないリーダーシップを子どもの時から育てます。その基本は、友を裏切

らないということですが。

郷中教育は6歳〜15歳の「稚児」から始まり、この年代のリーダーは稚児頭といえます。さらに上の15歳〜25歳は「二才」で、二才頭がいて、日々の教育実践を統括し責任を負います。西郷隆盛がまだ小吉と呼ばれていた頃、郷中間の争いの遺恨で、年上の相手に稚児頭の小吉が右腕を切られるという事件が起こりました。

郷中では自分たちのことは自分たちで決めて行動するという気風があり、西郷たちもこの刀傷の理由を家でも大人たちに一切口外しませんでした。切った側の親が西郷の家へ謝

りに来て初めてわかるのです。

「師友」の存在の大きさ。

——強い武士を育てるための集団教育というイメージがありますが。

原口 今の集団教育とはまったく違います。医者や弁護士になるような秀才やエリートばかりを集めて競争させ、効率よく教えるというのではありません。「方限」（城下の4〜5町四方の居住単位）で行われる郷中教育では、地域の子どもたちそれぞれの個性を大切に社会的協同性を育てていきます。江戸時代の儒学者・広瀬淡窓が言っているように「鋭さも鈍きも共に捨てがたし、錐と槌

させ、効率よく成績を上げるというでもないのですね。

原口 はい。「師友」という言葉があります。人間にとって大切なのは、友が師になることです。過去の人のことは本で学べばいいのです。郷中教育からは人間的胆力で引張っていく西郷のようなリーダーが輩出するのです。禁門の変の時、薩軍の大將であった西郷隆盛が狙撃されて負傷しても、次の人が大將となります。もしその人が倒れてもまた次の大將が出てきます。少数のエリートを育てるのではなく、師友同士で鍛え合うので、次々と大將としてのリーダーシップを発揮できるのです。

フィロソフィは「いろは歌」。

——人格教育が中心ということですが、その核となるフィロソフィは何でしょうか。

原口 郷中の子どもたちは小さい時から、戦国時代の島津家の当主、「日新新公」こと島津忠良の作った「日新いろは歌」を誦じ、日々実践していきます。年を経る中で、やがてその歌の意味がわかり、自分のものとしてします。

例えば、「いろは歌」の「い」はこんな歌です。
「いにしへの道を開きても唱えても

わが行いにせずばかいなし」

（古の学問の良い教えを聞いたり唱えたりしても、自らが実行しなければ何の役に立たない）
「ろ」はこんな歌です。
「楼の上も埴生の小屋も住む人の心にこそは高きいやしき」

（豪華な家に住む人も、貧しい小屋に住む人も、心が清く正しければ高貴であり、そうでなければ卑しい）

つまり、何よりも実行を大切にすることです。物事を「やるべきか、やれないか」ではなく、「やるべきか、やらざるべきか」で判断し、「やるべき」となったらすぐに「やる」。時間を置くと、どうやるのか方法を考えあぐねるようになり、最後には損得で考えるようになって、損だから止めようとなる。郷中教育を受けた者は、見通しやゴールが見えてなくとも、方法やルールが確立されていくとも、「やるべき」となったらすぐ始めます。

薩長同盟もそれで始まり、最初から倒幕の可能性を予見できたわけではありません。この実行型のリーダーはエリート教育では出てこないのです。師友の心で実践を重視し、切磋琢磨し合っているから、幕末の重要な局面でも信頼する仲間たちと「詮議」して、判断と行動ができる

のです。

——しかし、地域の子どもたちだけの同質的な集団にはなりませんか。

原口 それはありません。「いろは歌」の「に」はこうです。
「似たるこそ友としよけれ交らばわれにます人おとなしき人」

（友を選ぶ時、自分に似ている人を友としがちだが、自分より優れた人や見識を持つ人を選びなさい）
自分と同じような人と付き合うのではなく、自分がないものを持つている異質な人間と交われと言うのです。

こんな「いろは歌」もあります。
「敵となる人こそは己が師匠ぞと、おもいかへして身をもたしなめ」
（自分にとって敵となる人こそ我が師匠で、思い直して冷静になれば、手本となるものが見えてくる）
薩英戦争の時がそうで、自分たちが戦った英国の方が優れていると思ったら、留学生を何人も派遣して、軍事や産業や社会制度を学びます。薩摩は大航海時代の頃から開かれており、江戸時代を通して琉球貿易も行っています。北海道の昆布を、琉球経由で中国へ売ったりしていました。ずっと外へ向かって開かれてきた藩なので、尊皇攘夷で凝り固まる

とに使い分けなば」で、少数のタレントが引張っていく集団ではなく、他の郷中と競り合う中で、仲間意識が強くなり、集団内の個々が切磋琢磨してリーダーシップが養われます。

藩校教育ともまた違います。藩校では成績が問われますが、郷中は人格教育なので、成績は問われません。実際、西郷は腕を切られた傷がもとで剣術もできず、幕末〜明治の開国の時代に英語もできませんでした。西郷はリーダーに相応しい人格を有しており、皆がついていったのです。

優れた教員がいて、生徒を競争

原理主義ではなく、戦った相手の英国からいいものは取り入れようとするし、敵とも交渉するのです。

日本全体が危機だと思っただなら、薩摩だけでなくオールジャパンを考えて、禁門の変で戦った長州藩と手を結びますし、英国とも交渉して味方につけます。原理主義でなく、現実に即して大義を判断し、行動するのです。郷中教育で育った人間は、それぞれの個が強くて、かつ集団でも強い、そういう人間の集まりが危機意識を持って幕末をリードしていったのです。

——お話をうかがって、大河ドラマで見る幕末の薩摩の人々が歴史を変え、新たな日本を創っていく、その生き方のバックボーンがわかってきました。西郷どんの育った鹿児島城下の甲突川沿いの郷中教育から、西郷隆盛、大久保利通、大山巖、東郷平八郎など、明治の要人を20人近くも輩出しています。彼らが育ったのと同じ甲突川沿いの西田小学校区の郷中で育った稲盛氏も、この地で倫理観を培い、実践的なリーダーシップを身につけられたのだと思います。

（インタビュー 副センター長 倉石寛



自頭流では、剣を握る左腕の親指を右腕の肘に添えて、野太刀を真っ直ぐに振り上げて地軸を目掛けて打ち込みます。その時、右足を前に出し、左膝は地面近くまで落としています。腕の勢いで振りおろすのではなく、体ごと下に落として全身で太刀を打ち込みます。

特集① 鹿児島・鹿児島市

自頭流の精神が 世代をつなぎ、 「国の子」を育てる 「学舎」の地域教育。

明治維新を切り拓く若者たちを育てた薩摩の郷中教育は、学制公布（明治5年）により学校制度が整ったあとも、次世代を地域で育てる「学舎」と形を変えて郷中の伝統を残しました。現在も、郷中教育の学びの中心にあった「自頭流（じげんりゅう）」は、鹿児島市内の自頭学舎、共研舎で存続しており、野太刀（荒削りの木刀）を使う稽古で、身心を鍛えます。地域を思い、薩摩の国や日本、国際社会につながる「国の子」を育てる利他の教育です。

自頭学舎
宮内信正さん
自頭学舎舎長

竹下文雄さん
自頭学舎理事

赤崎紳一さん
自頭学舎監事

共研舎
森山清隆さん
共研舎舎長

伊東丞士さん
共研舎道場長

柚木盛吾さん
共研舎副道場長



学舎入口に掲げられている指針。

鹿児島市の西田小学校区にある自頭学舎は、稲盛和夫氏が通われていたことで知られています。稲盛氏は自伝に「郷中教育を受け、薩摩藩に伝わる自頭流剣法の稽古をするなどして、心身を鍛えたおかげもあって、いつしか私はガキ大将になっていました」（『ど真剣に生きる』NHK出版）と書いています。自頭学舎とはそもそもどのように始まったのですか？

宮内 西南戦争（1877年）で多

くの優れた若者が亡くなり、城下が焼けてしまった荒れた町の中で、「青少年をもう一度育てていかなければ」という思いで始まりました。もともと薩摩に根づいていた郷中教育（P2）と、西郷さんが維新政府から下野後、鹿児島に創った私学校の伝統を引き継いで、学舎が市内に次々と開設されたのです。

自頭学舎もまた西南戦争後に設立されましたが、島津日新公の「いろは歌」と「西郷南洲先生（隆盛）遺訓」を精神的な支柱として郷中の伝統を守っていました。最近、稲盛氏が自頭学舎の出身であるという証言が得られました。東さんという方が「稲盛さんと同じころに学舎で学んでいた」と語ってくれたのです。

自頭学舎は第二次世界大戦後に再開され、昭和30年代には多くの子どもたちが通っていたと聞いています。当時はどんな活動をされていたのでしょうか？

宮内 今から約60年前、私が10歳の頃に、「戦後の日本人の子どもや若者にどう誇りを持たせるのか」という問題意識によって再開されました。開設に当たっては西田小学校や鹿児島大学教育学部の先生方も応援してくれました。

昭和30年代には70〜80人の子どもが集まっていました。月・水・金曜は宿題など自学している年下の子どもたちを年上が見る日、火・木・土曜は相撲や柔道など全員で身体を動かして遊ぶ日でした。「自頭」という名前の通り、「ここは互いに切磋琢磨して学び合うところで、学校のように先生が教える場ではありません。友達同士で教え合ったり、年上の子にわからないところを聞いて教えてもらっていました。立ち居振る舞いには特に厳しく、立ち食いしているのを先輩に見つかると土曜の反省会でビンタを食らうこともありました。今ならパワハラになりかねません。しかし、地域での年上〜年下の関係は密で「弱い者イジメをするな」といった道徳が徹底していたので、イジメなどはありませんでした。学舎の子たちが育って鹿児島大学に入学する子が多くなる、大学生が20人くらいほど来て、子どもたちを見てくれるようになりました。

現在の自頭学舎の運営方法はどのように行われているのですか？

宮内 自頭流を毎週日曜の午前に学ぶとともに、加世田詣りや芋・田植などの体験学習も取り入れていま

す。特に自頭流の剣法は鹿児島県独自の古武道にもなっており、野太刀自頭流研修会の教えによって運営されています。

自頭流は、戦前はどこの学舎でも教えられていましたが、戦後は進駐軍によって禁止され、共研舎が昭和32年（1957）に復活させました。共研舎は下級藩士が集住した「三方限（高麗町、上之園、上荒田）」にあり、もともと自頭流の稽古が盛んな地域です。そこで、自頭の会員が共研に通って自頭流の剣法を身につけ、自頭でも稽古を再開しました。

竹下 学舎は自治運営されている場で、女親は入口から中は入れませんが、かつては通えるのは男の子だけ



伊東道場長の指導の様子。



稽古が終わり、野太刀自願流自彊道場の清掃をみんなでを行っています。

でしたが、今は女の子も入ってきています。学舎へは、神棚に向かって正座して挨拶してから入ります。これをする人は学舎に通っていたことがあるとすぐにわかります。

——自願流の稽古で子どもが育つというのは、具体的にはどのようなことなのでしょう。

柚木 自願流は自主的に稽古するもので、何年もやり続けて己を鍛えようと向き合い、自らを振り返り心身を育てていく場です。最初は辛いです。周りの熟練者が見てくれている。「この太刀ではやれないな」と周りの者はわかりますし、逆に周りがいいと言ってくれても、本人はそう思っていないこともあります。

その中で、子どもは自ら育っていきます。年上や熟練者が親以上に子どもたちのことを思い、育ててくれます。子どもたちは小1から始めることが多いのですが、3、4年生になると、少しずつ自願流が何かがわかってきます。中学校へ入るまでは、「身体づくり」をする時期だと思うので、自願流を中心にして学舎を運営しています。

伊東 学舎では「次の次の世代を育てるつもりでやりなさい」と言わ

薩摩琵琶と「天吹」という縦笛を習うように命じています。ここに二つともあるので、笛を吹き、琵琶も弾いてみましょう。

(赤崎さんに薩摩琵琶と天吹の演奏を披露していただきました)



正面入口から見た自彊学舎。

れてきました。教え込んでいくのではなく、下の世代に自願流をちゃんと伝えていく、身体に染みつかせていくことを目指しています。そうすると子どもたちが自ら学ぶようになり、みんなが集まるこの場へ行きたくなくなります。上下関係や人との関係も自然とわかってきます。

柚木 私も最初は挨拶もできなかったのですが、次第に大きな声で挨拶できるようになり、毎週足が向くようになりました。

伊東 私は「差をつける」のは大事だと思っています。切磋琢磨によって子どもができるようになったら褒めます。できない子どもは悔しさを覚えて、自ら成長していきます。太

——郷中教育の伝統を引く、子どもから若者までの自治的な地域の教育組織学舎のあり方がよくわかりました。自願流が西郷南洲先生(西郷隆盛)の教えをもとに「人のためにする」利他の精神を継承していることも理解できました。

刀を打ちつける木の束の前に立つたら、そこから生き死にの勝負が始まっており、真剣に太刀をおろすのです。ここでキョロキョロしたり喋っているようではダメなので、退場させます。こうして身体に覚えさせてから、自らを振り返り、考えさせます。年数を重ねると、他の人がどんな稽古をしているのか、どんな立ち居振る舞いをしているのか、わかるようになります。

一口に鍛錬と言っても、子どもはみんな一人ひとり違います。年齢も違えば体験も違う、性格も異なります。オーダーメイドで「この子はこういうやり方がいい」と導きます。学校のように十把一絡げにして教え込むという集団教育ではありません。「先生と呼ばれる人はいくらでもいるが、指導者はあんまりおらん」と言いますね。一律に教え込むのではなく、一人ひとりを観察して導くことが大事です。熟練者もまた、自願流で観察力・洞察力・指導力が磨かれていくのです。

森山 最近の親子は学舎の存在を知らないのです。体験学習などで楽しく交流することから入ります。年上の子どもたちの動きを見て、身体で覚えてできるようになると、友達もそれを見て入って来てくれます。私た

ちは「国の子を育てる」という考え方で学舎をやっています。「剣を振る」とは「人のためにする」ということです。進学塾のような「己のために学ぶ」というものは正反対の学びですね。この頃は小学校も協力的で、共研舎は荒田小学校と、自彊学舎は西田小学校と仲良くやっています。また、共研舎は学校法人でもあり、幼稚園を運営しています。

——自願流と共に、心身のバランスを取るための芸能を大切にしておられるそうですね。

赤崎 はい。戦国時代の島津日新公も心身のバランスを取るためには芸能が大事だとして、自願流とともに



自彊学舎の基本理念、西郷南洲先生遺訓、「敬天愛人」。



特集② 大阪・港区磯路

祭りから広がる、 「地域自治」と 「協働」のメソッド。



大阪市では、おおむね小学校区に当たる地域に地域活動協議会（地活）が設置され、みんなで協力しながらまちづくりを推進する地域運営が行われています。ここで取り上げる大阪市港区磯路は、高齢化した固定メンバーに頼りがちであった地域活動の担い手を刷新し、意欲があり才能もある新たな住民が次々と参加し、多様な魅力的な活動を展開しています。その核となるのは地域住民の思いを融和する三社祭りであり、地域防災や福祉の活動です。また資金源として区役所の委託業務を受託したり、資源回収により「稼ぐ」地域でもあります。元気な地域活動を展開している磯路の姿を港区まちづくりセンター支援員の梶原千歳さんに取材してもらいました。



宮入りで駆ける子どもたち。

私は大阪市港区まちづくりセンターに勤務し、地域活動協議会（※1）の運営を支援しています。港区の三社神社では、毎年7月20・21日に夏祭りが催されています。担当している磯路地域の佐野会長から、祭りへの参加をお声掛けいただき、獅子の巡行や夏越の祓いのお手伝いをしました。

1日目 太鼓巡行

「休みの日に、ごめんなあ。今、会館に来てるんやけど、お祭りパンツはMサイズでいいのん？」と祭りの1週間前に、磯路で一番のリーダーシップを発揮する佐野会長から電話をもらいました。また別の日には、「24cmの足袋あったで」と勤務先に届けてくれました。

衣装を持ち歩いていると、路地裏で遊ぶ子どもがひと時手を止め、「こんにちは！」と挨拶してくれます。

「お祭り出るの？」
「太鼓は5年生からなんで、僕は来年です！」

「そっか、じゃあ今晚は見に来るんやね。またお宮でね」
「はい！宜しく願います！」

どこで習ったのか丁寧な返事が返ってきました。青法被を着て粹がっ たやんちゃんな男の子たちも、宮に入

る時は一礼。大人の動きを見ながら、自分の立ち位置を確認しています。縁の下の力持ちチエちゃんは、「サトちゃんのお飾り可愛いから、この組紐、腰に付けとき」。そして、「うちには1部屋空いてるから、泊まったらええんよ」と、神戸に住む私を気遣って言ってくれます。

祭り番長シゲさんは、「今年は当番地区やから、世話係の白法被、着せたる。誰でも最初は初めて。失敗しても気にするな。何か言われたら、シゲの責任や言え」と言います。買い出しから帰ってくれば、「暑い中、ご苦労さん。冷たいもん飲んでいき。塩タブレットもなめときや」と声が掛かります。太鼓の宮入りをカメラに収めようと構えていると、祭りを知り尽くした佐野会長が、山車の動きに合わせて撮影ポイントへ1ヶ所ずつ同行してくれました。

境内に立てられたテントは、熱気に溢れています。夏の間、子どもを指導してきた地域の大人が「さん、はい！」と拍子を取り、子どもたちは力を振り絞って太鼓を打ち、傘踊りの女の子たちは輪になって飛び跳ねます。

祭りのために帰省してきた獅子舞の男たちは目一杯声を張り上げ、夏越の祓いをします。賽銭箱を掲げ、



夏越の祓いでお神酒を掲げる佐野会長。



現場を指揮するシゲさん。



夏越の祓いを獅子から受けます。



家への打ち込み。コノさん(左)とチエちゃん(右)。



太鼓へ飛び上がり、猛烈な勢いで打ち込む獅子の男たち。



4人の若者たちの息の合った太鼓打ち。

狂喜乱舞の獅子に沸き立った2日目最終の午後9時45分、当番も役職も鳴り物も関係なく、無礼講の総踊りです。今年もこうして祭りを迎えられることの喜び、無事に勤めを果たした安堵など、総踊りの輪の中にあると皆の心が融け合います。共同体に生きることは、祭りの想いを共有することなのでしょう。外から磯路に来ていた自分も、その一員になった気がしました。

昔は三社祭りは氏子だけのものだった。宗派にも厳しく、磯路に生まれ育った、限られた、人たちが以外は参加しにくい祭りでした。少子高齢化や寺社離れが加速し、氏子が減っ

巡行の最後に向かったのは、子どもたちが通う磯路小学校です。先生も保護者も獅子も、皆一緒に円になって、大打ち込みを行いました。「子どもたちが今年も元気に夏を越せませうように」と。

日が暮れる頃、獅子の宮入りが始まりました。先導する露払い役の「梵天」の二人は小学生の頃から親友。軽快な笛の音に梵天の調子がびたりと合い、勇ましい獅子も従順に付き従います。昨夜の疲労も昼間の酷暑も自ら振り落とすように、太鼓への打ち込みと夏越の祓いが間断なく続きます。

「打ちちまっせ、もうひとつせー、祝うて三度、めでたいな」。

常任総代を10年務めた佐野会長の三社締めで今年の祭りが締められました。来年は後進に役職を譲り、次の世代に祭りが継承されていきます。伝統とともに引き継がれるのは何よりも心意気であることを、確かに私たちは体験したのである。

総踊りの熱気が残る中、三社締めで祭りが締められました。



一升瓶を片手に踊り、笛と太鼓と「よしよし」の掛け声で、境内は歓喜に包まれます。炎天下での長い巡行を終えた夜のことです。もてなす者の心意気を感じました。

2日目 獅子巡行

1日目の太鼓の巡行を終えると、2日目は獅子の巡行です。巡行者一同、午前8時に安全祈願のお祓いをしてもらい、宮出しの後、真っ先に向かうのは子どもたちがお世話になる市岡中学校です。そこを皮切りに地域の家々への「打ち込み」(※2)が始まります。当日は曇りつない晴天、最高気温は35・6度でした。

「ご祝儀をいただき、拍子木を鳴らし、お囃子が響き、頭先導が隣3軒まで届くような声で口上を述べ、大きく勢いをつけた獅子が家の中へ駆けっていきます。1軒1軒、丁寧に夏の厄を払い、家族の健康を願い、お盆を清らかに迎えられるように。午後3時まで続いた打ち込みが力強さを失うことはありませんでした。「祭りに宿る力」を実感しました。

佐野会長が、「息子2人が毎年祭りに出るのを見ると、小さい時分から祭りに連れて行ったのは間違い

じゃなかったんやなと思う」と語っていたのが印象的でした。少林寺拳法を身に付けた長男と空手を習得した次男の兄弟獅子は格別です。

今年は磯路が祭りの世話をする当番地区で、シゲさんには当番の心得を教えてもらいました。「身内じゃないから気遣いが必要」。言われてハツとしましたが、当たり前のことをちゃんとやるということでした。

巡行中は材木屋さんや磯路会館でお接待を受けました。よく冷えたビールにポカリ、スイカや凍らせたゼリー。おしぼりまで凍らせてくれていました。まちの食事処でも、冷たい飲み物の準備があり、前を通ると手招きしてくれます。たらい一杯の水を配ってくれたり、霧吹きでミストを吹き掛けてくれたり、うちわで扇いでくれたり。お接待後は、感謝の気持ちを越後獅子で示します。お世話してもらえると、気遣ってくれること、素直に嬉しくなります。

午後3時、暑さも疲れもピークになる頃、「子どもたち、集合！」の号令。すると、一斉に子どもたちもバケツやホースの水が浴びせられました。お楽しみの水遊びの時間です。みんな、全身ずぶ濡れで、笑い声と叫び声、逃げ回ったりと大騒ぎ。これで元気回復し巡行再開です。



午後3時、水を浴びてはしゃぐ子どもたち。



朝から獅子が、家々へ打ち込みをして回ります。



傘踊りの女の子たちが梵天に続きます。



夜、境内を露払いしながら先導する梵天。

※1 地域活動協議会
おおむね小学校区を範囲として地域団体やNPO、企業など地域のいろいろな団体が集まり、話し合い、協力しながらさまざまな分野における地域課題の解決やまちづくりに取り組んでいくための仕組みです。略して「地活(チカツ)」と呼ばれ、港区には11の地活があります。

※2 打ち込み
獅子が歯をバクバクと鳴らしながら四股を踏み、目の前の獲物に襲い掛かろうとする動き。これには、人々の健康と安全を願う思いが込められています。

祭りの熱気を地域活動のエネルギーに変える方法。

キーパーソンに聞く

——大阪市内の都心近くにもかかわらず、活気のある祭りが残っているのはなぜでしょうか？

佐野 面白いからだと思えます。楽しいから誘いたい、一緒にやりたい。でも、僕はもともと祭りが嫌いだったんです。若い時は祭りに誘われても断っていましたし、祭りに出る人たちを見て、「仕事も忙しいのに奇特な人たちがな」と思っていました。

ところがある日、長男が獅子の抽選に当たったんです。今はこども会に入っている子なら誰でも祭りに出ることができそうですが、昔は子どもが多かったのでも引きてました。息子がお獅子をすると決まったものの、担当若手がいない。当時、子どもの獅子は、大人が肩車をして宮入していたんです。そこで、「親が出て来て、自分の子は自分で担ぎなさい」となった。出てみると「なんやこれ、楽しいやないか」と。驚きました。

——祭りにはどんな子も包み込む素地があるように感じました。

古島 例えば、高校生になるA君は、もともと磯路に住んでいたんです

が、両親が離婚して、お母さんと一緒に他地域へ引っ越ししました。お祭りには今年も出てくれることになったんですが、夜は遅くなっても自宅に帰ると言います。翌日も早朝の集合なので、「お父さんのところに泊まらへんの？」と聞くと、再婚して新しい妹もできていますので、帰りづらいいと言います。

夜遅くに帰らせるのも心配なので、佐野会長へ相談して、磯路会館に泊まってもらえるようにしました。宮入も終えて、汗びっしょり。お風呂屋さんに連れて行くと、バジャマを持って来ていない。「あんたなあ、そのままで寝るつもりやったん？」。慌ててバジャマを借りて来て渡すと、「こんな女みたいなんいやや」、「黙って着ときなさい。もう寝るだけなんやから」。小さい頃から知っているの、放っておけないです。

佐野 祭りの人間関係は厳しいので、やんちゃな子も礼儀を身に付けます。太鼓の上下関係は特に厳しいのですが、それに選ばれたら学校でも一目置かれる存在です。僕たちと

は祭りで知り合っているもので、外でもしっかり挨拶してきます。そういう大人がいる地元では悪さできないでしょう。コンビニにたむろしているだけで、僕たちも声を掛けますから。子どもたちは学校を卒業してからも三社神社に集まり、祭りが終わった後に同窓会もしています。

——祭りを通して地域社会を知り、そこでの作法を身につけていくのですね。佐野会長の周りはいつもにぎやかで、磯路では新しい事業をどんどん実施されていますが、そのセンスの秘訣は何でしょうか？

佐野 「それ、ええわ。それ、頼むわ」と言うだけです。誰かが「秋はお月見やりたいなあ」と一言。「それ、ええやん」「月見と言えば団子ですね」「それ、作ろうや」「せっかくなら巨大なやつにしませんか」「それ、めっちゃ面白いわ」。バスケットボールを真綿でくるんで、三宝に見立てた朝礼台に5つ乗せて、巨大な月見団子を飾ったこともあり。そんな風にいつも皆でやってきました。

地域には、工務店の店主や糸屋や主婦、いろんな人が揃っています。個性もさまざま、得手不得手もある。シゲさんは会議は遅刻が多いけど運動会や祭りを仕切ると一番。実直なウメちゃんには地域の防災無線を一

振り返り会を持たれていますが、その理由は何でしょうか？

佐野 すぐやるのが大事です。準備から片づけまで1日汗をかいたスナップの労をねぎらいたいし、みんな言いたいことだつてある。その気持ちや言わずに家へ持ち帰るのはよくない。その場でちゃんと言い合っ

て次に活かしたいと思っています。振り返り会では一人ひとりに発言してもらいます。議事録は1年後の会議に持参して、話が脱線したり改善点を忘れていたりしたら読み上げます。白熱することもありますが、そんな時にも大阪人らしく冗談が飛び交いますよ。

古島 盆踊りの時なら、撤収作業を終えると夜の11時。もうくたくたですが、それでも会館へ直行して、少しの時間でもみんな席につき。議事録には発言をそのまま記録するようにしています。「お腹空いた」までタイピングしたりして（笑）。端折らずに、ありのままを書き留めるように心掛けています。そうすると臨場感があって、読み返し

た際に「そうそう、そんなこと言っただな」と反省点を思い出してくれ

——古島さんは地域活動に福祉を積極的に取り入れようと努められていますが、その原動力は何ですか？

古島 先日、スーパーで買い物をしていたら、車イスの女性がいらしたのでお手伝いしようと声を掛けました。同じ地域に住む方で、広報紙が自宅のポストに入っていないなど、いろいろと不満をこぼされました。私はそんな時、うん、うんとと腰になって相づちを打つようになっています。聴いてくれる相手がほしいんだと思います。

その方は文句を言えば言うほど笑顔になっていかれました。そういう瞬間がたまらなく好きなんです。最後には、「このお菓子、持って行き」と買ったばかりのお盆の干菓子を分けてくれようとしてました。お供えする前にもらった罰が当たるからと遠慮すると、「お盆が終わったら、家において。お供えしたお菓子は甘くなるって言うから」と言ってくださり、胸が熱くなりましたね。

磯路地域活動協議会 平成30年度事業計画書

事業	部会	No.	事業名	開催予定日
補助金対象事業	やさしさ	1	高齢者食事サービス事業	通年
		2	いきいきサロン事業	通年
		3	高齢者見守り(友愛訪問)相談・援助活動事業	通年
		4	世代間交流活動(しめ縄作り)事業	12月
		5	高齢者健康講座(いきいき百歳体操)事業	通年
		6	ふれあい喫茶事業	通年
		7	子育てサロン事業	通年
		8	居場所づくり事業	通年
	あんしん	9	避難所開設訓練事業	6月17日、1月19日
		10	AED関連事業	6月以降
		11	防犯夜警事業	12月28日・29日
		12	防災マニュアル策定事業	未定
		13	広報事業	通年
		14	2018 桜通り de 桜まつり事業	4月7日
		15	磯りんピック事業	5月
	すこやか	16	区民まつり事業	10月7日
		17	グランドゴルフ大会事業	11月
		18	すこやかフェスティバル事業	3月
		19	はぐみネット事業	通年
		20	生涯学習ルーム事業	通年
		21	磯路小学校体育施設開放事業	通年
	すみよい	22	映画上映会事業	6月、2月
		23	磯路地域盆踊り事業	8月18~19日
		24	カラオケ大会事業	10月
		25	磯路地域町並清掃事業	通年
自主事業	資源集団回収			通年
受託事業	「広報みなと」配布業務委託			通年

※3 資源集団回収 家庭から出る新聞・雑誌等の資源を自治会やこども会等の住民団体が自主的に収集し、その売上金を地域のコミュニティづくりに活用する活動。



盆づけの片づけを終えて、地域の会館では振り返り会が行われた。



磯路盆踊り。

「広がる磯路の地域事業①」 自主防災組織「磯路風」 地域は地域で「守る」と「つなぐ」。

阪神・淡路大震災では、市民自ら消火や救出作業に当たりました。住民による自主的な地域防災活動の重要性が再認識され、震災の翌年、大阪市では地域振興会を基盤とした「地域防災リーダー」が組織化されました。磯路には、37名からなる自主防災組織「磯路風（イソップ）」があります。そのうち、防災リーダーは30名です。働き盛りの30〜40代7名、女性5名を含む実働できる組織です。定例会は毎月開かれ、真剣な議論が交わされています。

大阪府北部地震発生。その時、磯路は。

2018年6月18日午前7時58分、大阪府北部を震源地とした地震が発生しました。最大震度は6弱、大阪市港区は5弱を記録しました。ちょうどその前日、磯路では防災訓練を行っていました。7月号の「磯路地域活動協議会通信」の編集後記に、チエちゃんはその時の様子をこう書いています。



避難所開設訓練。

「奇しくも地震の前日、避難所開設訓練を行っていた際、『磯路小学校のプールの壁、ひび割れあり危険』という屋上駐車場の壁が壊れており、収容受入れ数の見直しが必要」など、よりリアルな情報が無線から届いていました。磯路地域の防災を一生懸命考えてくれる頼もしい磯路風のメンバーも、地震の瞬間は大半が既に職場に向かっています。この時間に磯路にいるメンバーに立ち向かうことができるのか、怖さを感じていました。何から手をつける

のか、電話も通じない不安の中、メンバーから寄せられるSNSやLINEからの情報と励ましが心強かったのは言うまでもありません。かつて、防災リーダーは町会長推薦でした。名簿を作って行政へ提出しても、町会長自身が防災リーダーのことをよく理解していないこともありました。行政から配られたヘルメットや長靴、防災服が押し入れの奥深くに眠っていることも、しばしばあったようです。「形だけではあかんねん。ほんまに地域を守るようになるう」。発災時には体力のある若手が欠かせない、女性目線も取り入れたい、日中に何かあった時に地域にいる人間も必要。磯路では地生活足と同時に、自主防災の組織作りを始めました。

若い防災リーダーを抜擢

今年、防災リーダーになったタカさんは33歳、2児の父です。3年前のふれあいカーニバルにストラックアウトがあり、タカさんは息子さんとパスの練習をしながら、シュートのコツを覚えていました。その動きがプロ選手っぽく、シゲさんとサトちゃんもチエちゃんが揃って目を付けました。聞けば、サッカー強豪校の出身で、サトちゃんの後輩でした。



災害対策本部。

避難所開設訓練後、片づけを終えて、いつものように会館で振り返り会を持ちました。区長も訓練に引き続き参加します。議事録には、防災リーダー一人ひとりの発言が記録されています。避難所開設訓練後、片づけを終えて、いつものように会館で振り返り会を持ちました。区長も訓練に引き続き参加します。議事録には、防災リーダー一人ひとりの発言が記録されています。

れています。例えば、コノさんが「発災時には、港区11校下から区本部へ無線連絡が入る。対応できるのか。文字ベースでの情報も必要ではないか。SNSなどIT化すべき。WiFiのルーターも磯路本部に欲しい。区本部も、多地域から無線が入ればパニックになるはず。仕組みづくりを考えるべきではないか」と発言。コノさんは、普段、医療機関のIT部門にお勤めです。区役所からは、「いくつかの手段を考える」とその場で回答がありました。

南海トラフ地震が来たらどうするのか？

南海トラフの海溝型を想定した地



訓練後の振り返り会。

震では、地震発生から津波到達まで114分。自分の安全を確保し、家族の安全を確認し、近隣に声を掛け、防災リーダーが磯路小学校に駆け付け、災害対策本部を設置完了するまでに30分。その本部を司令塔に、情報収集・救出救助・避難指示活動ができるのは正味54分です。津波が到達する30分前には、地上にいる磯路風も活動を引き上げ、3階以上の建物に避難しなければなりません。訓練には、区役所が無線のシナリオを用意していましたが、誰もその紙を事前に見ていません。それぞれの持ち場で緊迫した時間が刻一刻と過ぎていきました。

私は、メンバーに交じり、本部の書記を担当しました。無線で飛び交う状況報告をチエちゃんが書き取ります。電波が悪く、声が割れることもありますが、途中で通信が途絶えて、断片的にしか聞こえない時もあります。それでもチエちゃんの走り書きは、どれも端的で明瞭なものでした。私は、間断なく手渡されるそのメモを必死になって壁の模造紙に集約していきました。

そのうちに、無線の向こうで起こっている顔が見えない誰かの事故も、自分ごとになりました。防災訓練は本番そのものです。

『磯路防災あんしんマニュアル』

平成27年、港区役所の呼び掛けのもと区内11の地活で防災マップが作成されました。磯路では、議論に議論を重ね、既存のフォーマットを大幅に改良。「避難の心得7カ条」など防災において伝えたい情報を盛り込んだ『磯路防災あんしんマニュアル』は、全戸に配布されました。現在は高齢者向け『やさしさマップ』の作成中。病院の診療時間や、買い物の宅配やお店情報、介護タクシーなど、必要な情報を1枚のマップに集約。携帯してもらえるよう、折り畳んで高齢者受給者証にぴったり入るサイズにする配慮も。70歳以上の住民900名に配られる予定です。



磯路防災あんしんマニュアル。



玄関に掛けられた白いタオル。

でも見えなくても、一本の白いタオルには一つの暮らしがあります。磯路風が気づかせてくれたことです。

広がる磯路の地域事業② 資源集団回収

地域でお金を「稼ぐ」ということ。

資源集団回収は昔から地域の子ども会で実施していました。人手不足から子ども会での継続が難しくなり、平成27年に地活で引き継ぎました。年間の売却益は120万円。その資金で子ども会を支援すると同時に、築30年が過ぎ老朽化した会館をリフォームするための貯蓄を始めました。

資源回収は地道な作業

毎月第4日曜日が資源集団回収の



集積場では、自分たちで分別しながら荷を降ろします。

は放送車を運転します。キタさん、ウメちゃんらは、磯路から少し離れた集積場へ自転車で行きます。朝が弱いチエちゃんは、途中から遅れてやって来ます。

回収作業は2人ペアです。佐野会長が運転し、コノさんが黄色いビブスを付けて一戸一戸を回ります。新聞、雑誌、段ボール、アルミ缶。玄関前に整然と置かれています。大きな青いトラックは、路地裏もものともせずに入っていきます。

「おばちゃん、今日はある?」。佐野会長が車を降りて玄関先から声を掛けます。「あるで」。先に盗られんように、まだ外に出してないねんけど、今日は多いで」「ええで、ええで、ほんなら上がらせてもらおう」と運び出します。「また来月も来るから」「ありがとうございます」と2人は挨拶をして、お隣へ。

古紙やアルミ缶はお金になるため、早朝や深夜に不法に持ち去って行く人がいます。地域の人は、シャッター裏に隠してくれていたたり、「磯

日。佐野会長とキシさんとニシヤンが自前のトラックで地域を回ります。保険屋のヤブちゃん

その方が家が片付きません。それでも月に一度の資源集団回収に出してくれるのは、日頃のお付き合い。地元のお茶店や美容院も、佐野さんに頼まれたらと、協力してくれるようになります。

祭りの連帯感が他の活動にも

各戸回収に加え、まちの10ヶ所に設けたエコステーションや414世帯が住むUR住宅での回収作業には少なくとも4時間はかかります。URの倉庫には、天井まで段ボールが積み上げられています。3台のトラックは何度も磯路と集積場を往復します。集積場へ運んだ後も自分たちで荷降ろし。分類しながら大きなコンテナへ投げ入れます。

7月の資源集団回収は、祭りの翌日でした。男性陣は、先に境内のテントを解体してからやって来ました。佐野会長は、「普段は月10万円くらいの売却益やけど、夏は13万円になんねん。なんでかわかる? 夏はビールを飲むやろ。新聞・雑誌よ

広がる磯路の地域事業③

「いそじくらんど」 子どもの居場所を大人がつくる。

磯路における福祉のあり方

磯路では、福祉は「ふだんの、くらしを、しあわせに」と解釈されます。その磯路で新たに子どもの居場所づくりが始まりました。核となるのは、大阪府で高校内居場所カフェ(※4)を行うNPO法人フェアロードと地活を中心とした地域のボランティアです。

3月のプレオープン日に、子どもたちと居場所の名前を「いそじくらんど」と決めました。月1回、土曜日の11時~15時に会館で開催しています。訪れるのは主に小学生15名ほど。誰にでも開かれた場所です。プレオープン時には、磯路小学校と



(上) みんなで作った居場所の旗。
(下) アートワークショップの作品。

いそじくらんどでは「くう(食う)・しる(知る)・アート」をテーマに、

11時~12時が脳トレ、12時~13時が昼食、13~15時が工作やゲームの時間です。脳トレでは、プリントを使います。1級がゴールで、10級からスタート。大人が付き添ううちに「分かんへん」と言っていた子も競い合うようにプリントを解いていきます。

奥の台所には鍋一杯の具だくさんスープ。12時、広間にホットプレートを並べます。お好み焼き粉に、子どもが大好きに具材を入れます。エビ、イカ、ブタ、コーン、チーズ、天かす。たくさんの具材に子どもたちはワイワイ。限られた予算の中、子どもも料理に参加できるメニューで、美味しく栄養のいいものを考えます。皆で食べることは楽しい。大人たちは毎回、工夫を凝らします。

予定調和な連携はいい

ある日の昼食後は、アートワークショップを行いました。先生は、上

海出身の張さんです。

大学の美術教育を専攻していましたが、張さんが用意したお題は、「粘土を使って理想の遊び場をペアで創る」というものでした。

一人でやりたいと言う子、何色もの粘土をひたすら混ぜる子。子どもにも無理強いはしないのが、いそじくらんどのモットー。むしろ一人ひとりの個性をととても大事にしています。

フェアロードのクリちゃんは、「予定調和な連携を超えたい」と言います。「学校・行政・地域の連携体制図の形だけは作られているけれど」と。大阪市24区のうち、港区も含めた3区が今年、「子どもサポートネット事業」のモデル区になりました。学校の気づきを活かし、サポートを必要とする子どもと子育て世帯を、学校・区役所・地域などが連携して社会全体で支える新しい仕組みです。

フェアロードは、主に小学生を対象とした「いそじくらんど」に続き、



12時、皆で作るお昼ご飯。

10月から磯路の子どもが通学する市岡中学校に居場所カフェを開設することにしました。小学生には子ども食堂があり、高校生には高校内居場所カフェがあるが、中学生へのサポートが抜け落ちていると問題視するクリちゃん念願の事業です。陰では、佐野会長とチエちゃんが、区長や市岡中学校長と話をすると、奔走していました。

子どもとその家庭を地域で応援していく。「知っていれば助けることができたのに」というチエちゃん言葉が忘れられません。予定調和な連携を超えて、子どもを守る仕組みづくりへのチャレンジが続きます。

※4 高校内居場所カフェ 校内に設けられているフリースペース。相談室などの名称ではなく、誰でも気軽に立ち寄れるカフェのような場所です。時間を過ごしに行くだけでもいい。ぼろぼろと高校生からこぼれ落ちる悩みや不安などを聞き、不登校予備軍や中退や学籍を離れた若者を学校と連携してサポートしています。



スチール缶が交ざっていないか確認しながら、アルミ缶をコンテナバッグに詰めていきます。



子どもたちが描いた手作りのぼんぼりには寄付者の名前が入ります。

広がる磯路の地域事業④ 桜通り de 桜まつり 地域の名所を継承するために。

春、磯路に桜のトンネルができました。ソメイヨシノなどが道の両側に58本、800mに及びます。学校や会社へ急ぐ人もスマホを取り出し、自転車のスピードも遅くなり、車イスの人もヘルパーさんに付き添われて花見にやってきました。

昭和45年（1970）の大阪万博を前に、市内では緑化の機運が高まり、磯路では桜を植樹しました。当初、桜は街路樹には適さないと大阪市は反対しましたが、日参する住民に市が根付けし、自主管理を条件に認められました。それから40年、町会有志46戸で結成した「桂音会」が手入れを続けてきました。会の名前は、当時の町名である桂町と音羽町から取られました。市の都市景観資源にも登録されています。

会員の減少や高齢化が進み、桜の維持管理が難しくなってきた頃、港区で地域福祉活動計画が策定されることが決まりました。初回の住民ワークショップで「磯路の自慢」がテーマになり、多くの人が桜通りを

挙げました。そして、現状を知った地活と桂音会が6回の討議を重ね、広く住民に桜通りの課題を知ってもらおうと、桜まつりを開催する運びになりました。財源確保に選んだ手段は、広報も期待できるクラウドファンディング。行政指導ではなく、民間主導で取り組む手法は、大阪市の市民活動の先進事例となりました。今年で4回目を迎えた桜まつりには、港区11の地活のうち、磯路を含めた7地域が参加し、来場者は5千人を超えました。

唐揚げ、イカ焼き、お好み焼き、地域が作る味は本格的です。事前の全体会議はたったの1回。模擬店の配置決めから、電気設備の設置、警備の手配、保健所への届出、経費の分担、搬入出時の取り決めに至るまで、実行委員長である佐野会長のもと、7つの地活が連携して準備が進行していきます。そこには、三社祭りで培われた地域間のあうんの呼吸がありました。

当日は模擬店に加え、歌や踊りのステージもあり、にぎやかな1日でした。



地元歌姫「てんどんよそみ」さんと筋原港区長の熱唱。



模擬店が並ぶ通りは、多くの来場者でにぎわっています。



満開の桜通りを車イスで悠々と散歩。

広がる磯路の地域事業⑤ 「広報みなと」配布事業 高齢者の見守りの意味も。

大阪市港区では区の広報紙配布の委託先を公募型プロポーザルで選定しています。その結果、今年度もポスティング業者ではなく、地域へ委託されました。地域課題解決型「広報みなと」配布事業という名称です。広報紙を配りながら高齢者の見守りを行うなど、配布事業を通して地域の課題解決を図っています。

磯路地活では、磯路とお隣の池島地域への配布を担当しています。磯路3660部は地活が担当し、池島2390部はこども会が配ります。

るのです。

この事業を担って今年で5年目。過去には、配布中に認知症の初期症状が出ていた方を見つかったり、団地の上階で鳴っているSOS音に気づき、寝込んでいた高齢者の安否を確認したこともあります。それらを機に、福祉関係者が一堂に会する地域ケア会議を開いたり、緊急連絡網も作成しました。認知症の研修会や声掛け訓練等も開催して、広報紙を配布する人には全員受講してもらっています。チエちゃんは、「徘徊も単なるお散歩」と呼べるまちにしたいと言います。

毎月、平日の仕事終わりや土・日などの休みの日に、1軒1軒地域の人が自らポスティングす

むすび

昨春秋、総務省の地域力創造グループ

地域振興室とみずほ総研が、地域運営組織の先進事例調査（全国4ヶ所）のひとつとして磯路を訪問し、地活の中心メンバーにインタビューをしました。そこで評価されたのは、磯路地域活動協議会が、「町会、女性会、子ども会などの既存団体のネットワークとして設立」され、それらの団体が「あんしん部会」等4つのチーム別部会に分かれて、地域住民と丁寧に対話し、事業計画から実施、振り返りまでしていることでした。ここでは年間100以上の活動を行います。これは可能にしているのが、「役員の75歳定年制の導入」。意図的に人材の流動性を高め、若くて実行力のある人材が組織運営の中心を担っています。

有償ボランティアで地域運営をしているところが多い中、磯路では無償ボランティアで運営されており、さらに資源回収や区の受託事業で自主財源を生み出していることも評価されました（総務省「地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業報告書」平成29年度）。

この磯路の地活協の活動をサポー

トしているのは、区役所のさまざまな担当課及び区と地活を仲介する中間支援組織まちづくりセンター（まちセン）です。区役所の「地活の力を見極めつつ、伸ばせるところは伸ばす」という方針のもと、まちセンの曾我アドバイザーは、「合意形成や会計処理など、事務局が機能している地活では、行政との連携を常にとり、委託業務を受けるとともに、他のNPO等とのマッチングを進めて、福祉や文化、防災などの地域住民向けの事業を深化している」と言います。

まちセンの金子スーパーバイザーは「時間があれば、地域活動の現場へ行って、若手の人材や新たな活動の芽を探し、地域を起点にさまざまな活動が展開されるように支援している」と、地域の力を引き出すことを重視しています。

現在、国を挙げて「地方創生」の政策を推進していますが、リベラリズムやポピュリズム等の、空中戦的な議論を乗り越える契機は、ローカリズムにあると思われます。祭りを中心に、防災や福祉等の地域活動の現場で次世代が育ち、協働の輪を広げて地域を自治することが、磯路では行われています。

（リタ編集人 金井文宏）



広報みなと 平成30年10月版

京セラ、KDDI、JALグループを
哲学経営で率い、盛和塾塾長として
中小企業経営者を育ててきた稲盛和夫氏。
このシリーズでは、
稲盛哲学をどのように咀嚼し、
自分のものとしているのかをお伺いします。

マイ・フィロソフィ

- ベクトルを合わせる
- 仲間のために尽くす
- 信頼感を築く



共研舎道場
伊東 丞士さん



共研舎道場
柚木 盛吾さん



共研舎道場
秋窪 大さん

共研舎
郷中教育の伝統を
引き継ぐ「学舎」
(鹿児島市上之園)

共研舎では、子どもの時から互いのことを分かり合って信頼関係を築き、自顕流の精神を次世代につなげました。自顕流は一人が上手くなるというのではなく、皆が上手くなることを目指します。重要なのは子どもたちが「ベクトル合わせて」学ぶということです。共に学んだ者は兄弟のようになり、中学校に入って部活に入らず、共研舎一筋で行く者もいました。この道場で育った者は、全員がリーダーとなりうる資質を有しています。

稽古の時に個々の子どもたちの体格や性質をよく観察して導いていますが、「ベクトル合わせて」指導しています。故に、「自分はいつ死んでもいい、次の者が指導を続けてくれる」という仲間への信頼感があります。

稽古が終わった後や行事の時に、「西郷さんはごげんやったな」「昔はごげんやったぞ」と口伝えて聞いているうちに、その生き方は染み込むようになってきます。学校の授業で道徳を習うというのではなく、普段から生き方を実践的に学んでいくのです。

Infomation

《参加無料》

『利他の心』で集う1000人！カノン上映会

2018年12月2日(日)、立命館大学大阪いばらきキャンパスにて、アルコール依存症やDVやモラルハラスメントをテーマに描かれた家族再生の感動物語、映画『カノン』の上映会を開催します。映画監督やアルコール依存症第一人者の対談を交え、依存症や障害などの社会問題について一緒に考えてみませんか？

日 時：2018年12月2日(日)

時 間：11：00開場、12：00上映開始、15：00対談、17：00閉会

場 所：立命館大学大阪いばらきキャンパス内 フューチャープラザ(B棟)2F グランドホール

※ JR茨木駅より徒歩5分 阪急南茨木駅より徒歩10分

申 込：下記よりお申し込みください。

<http://www.kokuchpro.com/event/rita1000kanon/>

※どなたでもご参加頂けますので、お気軽にお越し下さい。

RITA LABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

利他ラボ
RITA LABO

<http://www.ritalabo.jp>



お問い合わせ：contact@ritalabo.jp

facebook [rita labo](#) 検索

発行：立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITA LABO(リタラボ) 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

編集人：金井文宏 デザイン：坂本佳子、齋藤直己 2018年10月31日発行